

## 第16回エンピツ賞受賞作、東海林さだお賞

私は電池が好きだ。

いや、愛している、とさえ今の私には断言できる。

中でも私が愛しているのは、単二形という娘（やつ）だ。

ここは人によって論議のわかれるところだろう。

私はほつそりとした単三がいいわ、

いやオレは単一の重量感がこたえらんねえ、

という人々もいるかもしれない。

いて当然だろう。

人の好みは千差万別であるし、またこれが最高、

と安易に決められるほど、

この世界は浅くない。

私も初めはそうだった。なべて“電池”というものを愛していた。

単三は確かにかわいい。そういつた点では趣味的に言えばロリコン、

あるいは美少年タイプを好む者達の間で人気がある。

ほつそりとした身体、そつと触れなくなるような、なで肩。

あの肩を、人差し指と中指で軽く愛撫していた時の私は時をわすれ、

瞑想のインナースペースのとりことなっていたものだ。

単三には、白いレースがよく似合う。

春風にレースをなびかせて、リカちゃんハウスの中、

単三（あのこ）は遊び疲れるまではしゃぎまわっていたものだ。

だが、別れは急にやってくる。

人は愛する者の新しい欠点を見つけてもまだ愛することはできる。

しかし今まで愛していた事柄が実は醜悪きわまるものだとなった時、

もはや再び胸ときめくことはあるまい。

単三のカレンさに、私は突然別のものを感じてしまったのである。

単三は虚構だ！

あの細さ、軽さ、明るさも、電池（かのじょ）本来のものではない！

あれは軽量化を強いられ、

資本家の都合で勝手に縮小された部屋（ボックス）に

みずから押し込めるためのものだ。

それではまるで、てん足ではないか！

ためにに電卓でもウオークマンでもいい、

電池のフタをとって見たまえ。

暗闇におびえ、

身体をすり寄せあっている電池達（かのじょたち）の肩は、

屈辱と悲しみにうち震えているではないか。

それを見たとたん、私はヤダ、と思ってしまうたのである。

思ってしまったと、あの細さもやたらさらさらしいものに見えてくる。  
もはや単三は、私の美の範疇から外れてしまった。

若いうちの恋などは、だいたいにおいて耽美的なものである。  
私の恋はじき醒めた。

単一の場合は、すこし違う。

なんといつても自信にあふれているのである。あの手ざわり、  
あの握り具合、

そしてズシリと重いあの重量感ほ“ミスター”の名に恥じない

(我々マニアの間では、小さいほうからそれぞれ、

レディ、ボーイ、ミスターの愛称で呼ばれる。

これは一般にマニアというものが、

その仲間意識を昂めるために特別な共通語を

つくるという通例にもれないもので、

それ以上の意味をもたない。

よって単三を愛する女性、単一を好む男性がいても、

それは直接同性愛などとは無縁のものである。

なおその他の電池、

たとえばトランシーバー用とかカメラのフラッシュに使うものとかは、

邪道とはいわないまでもかなりフリークス好みのもので、

決まった呼称はない。

私は小さい頃から電池というと単一がまわりにあった。

というのも親父の都合でカネモチだった我が家には、

かなり大きな、火を吐くゴジラのおもちゃがあったからである。

だから電池(ここ)の世界に入ったのも、単一がきっかけだった。

“子供の頃はみんな神童”の例にもれず、

私も近所では名の売れた神童だった。

神童はフツの子と違うから、フツのことはしない。

フツの遊びもしないし、フツの学校にも行ってはいけないのである。

だからフツの中学なんかは世間が許してくれなかったから、

私は小学生の分際で受験勉強などをしていた。

学習塾も今ほどなくて、当時としてはカッキなことだったのである。

しかし私のデリケートな神経はまわりの圧力に耐えきれず、

しばしばポキッといっちょまいそうになるのであった。

そんな私を支えてくれたのが、単一なのである。

たしか理科の実験かなにかで学校でもらったのをとっておいたのだ。

色は黒。

ナシヨナルのヤツが二つ。

それを常に私は机の上においていた。

そして一個を左手に握りしめて参考書に向かったのである。

小学生の私には単一（それ）は重かった。完全に握っていたかどうかもあやふやである。

しかしその重量感、今にも落ちるのではないかという緊張感は、私の実在を何よりも確かに私に教えてくれたのだ。

大きくて、重量感があつて、

頼れる電池（やつ）……それが単一であつた。

少年期にありがちな同性愛的傾向を認むるならば、単一に対する気持ちは、まさにそれであつたらう。

しかしある日、忌むべき事件が起こつた。

私はめでたく全寮制の某私立中学に合格した。

待望の寮生活に私は充実した日々を送っていたのだが、ある日、聞いてしまったのである。

“電池おどり”を。どこであれ、たいていの寮には、伝統的に新入生をイビるための

様々な方法が語りつがれているものである。

三階の窓から足首をつかんで逆さ吊りにされる“するめの刑”。

寝ている間にパンツをおろされ、

マジックでゾウさんの絵を描かれる“ゾウさん”等々。

“電池おどり”もそのひとつであつた。

まず新入生を部屋の窓の前に立たせる。

次に各々が自分のラジカセの中から六〜八個の単一をもって

反対側の壁に並ぶ。

そして新入生の足元がけて単一を次から次へと投げつけるのである。

新入生は必死で足をあげてよける。

それがおどるようであるところから“電池おどり”の

異名をとっているのである。

数年前に骨折者をだして以来、禁止されていたらしいが、

私のクラスのいじめられっ子、浜田ヒロシという三階の部屋の奴が

“おどら”されてしまったのである。

その日は日曜で、昼食を外でとつた帰りだった。

門の近くまでくると、寮のほうから、

「ガシャーん」といふものすごい音がする。

急いでかけつけると、三階の窓のひとつが粉々にくだけ、

玄関前のコンクリートにきらきらと散らばっていた。

どうも電池を投げる手がすべつたらしいのだが、

そんなことは私にはどうでもよかつた。

私の目にとまつたのは、

人だかりより少し離れたところに転がっている単一の電池である。

三階からすごいいきおいで落ちたのであろう。

あの硬い堅固な外装がパツクリ開かれていた。

中から黒いものが見えている。

それはまさに“犯された”としかいいようのないものであった。ラジカセに入っている時も少しも臆したところがなく、

毅然として自立している、その尊厳はもはや見るかげもない。

-. -. -. 私は二度と単一からは

安らぎも信頼も得ることはないだろう。-. -. -. そう感じた時、私の単一に寄せる想いは終わっていた。

そうした様々の遍歴を経て、

今私の手には単二がある。威あれど猛からず、

こじんまりと力強く、単二がある。

私がどのように単二を愛するか、などということは、

今あえて口にすまい。それは私のプライベートであり、

そんなことは一度この世界にはいれば自然と開発されていくものだ。

着がえをつくる奴もいる。

まっ白な絹<sup>①</sup>しドウフの上にそつと載せて

何時間も倦くことなく見つめる者もある。

それで、いいのである。